な基本的な問題の研究の興隆が望まれる。

敬語に関して、塚原鉄雄氏「卑者に対する敬語――『日本紀をこそ読み給ふべけれ』の解――」（平安文学研究15）は、副題が当面の課題ではあるが、〈敬語法は、対象――聴者もしくは表現の素材――を尊敬するという心理的契機と、話者と対象との間に断層を設定する、いわば物理的契機とに支えられているわけである〉から〈下位者もしくは同列者に対する敬語の本質は、形の上で尊敬することから齎らされる自他の断層によって、話者自体を、間接的に尊敬する語法といえよう〉と、品位を保つための敬語法を説いている。伊藤和子氏「源氏物語にあらわれた『御覧ぜらる』と『見奉る』」（西京大学学術報告人文4）は、標題について前者が後者よりも敬意の高いものであることを、場面分析により、また類例から演繹的に論じたものであるが、平安時代の敬語体系或は敬語生成過程一般に通じる考察を含んだもの。また三宅清氏は時枝誠記氏の反論に対して再び「『申したまふ』について」（国語と国文学6月）を以て応えたがその他の論考と共に展望「国語史」「方言」等を参照していただきたい。

既に述べたように、本年度の傾向としては（一）構文論の研究が多かった。（二）国語史とは？　の問題が考えられた。（三）独特の心理主義的な論説が目だった、などが挙げられようが、私見を挟むならば、（一）は主流を橋本博士に仰ぎ、山田博士、時枝博士などの流れが添うもの、（二）は時枝博士の提唱に応えるもの、（三）は新生の胎動とも言うべきもの、であろうか。いずれ、今後の発展を俟って後世の国語学史家に委ぬべきものではあろうが。

―国学院大学講師―

五、国語学一般（音韻・文字・語彙・意味）

鈴木真喜男

一、音韻

まず、第一にあげるべきは、服部四郎博士の「音韻論から見た国語のアクセント」（国語研究第二号、国学院大学国語研究会）であろう。音声学と音韻論との根本問題にふれつつ、はじめてアクセントを自覚的に音韻論の問題として――つまり、真に音韻論の問題として――とりあげ、そこから、独自の見解にもとづく「アクセント素」の説定など、あたらしい学説をのべられたものである。単に、アクセントに関する理論的考察としてのみでなく、同時に日本語のアクセントを例に、博士の音韻学説を展開されたものとして受容するとき、真にたゞしく理解しうるであろう。将来にむかって、おおきな波紋をなげかけるものと期待される。博士が、つねに先頭をきって、日本における斯学の水準をたかめようと努力をつゞけられるのは、感謝さるべきであろう。いまだ、この服部音韻学説に対して、批判質疑の発表をみないのは、さびしい気がする。

ここにアクセントに関する論考をついでておくと、林大氏の「アクセント私見」（跡見学園紀要）、奥村三雄氏「単位語の認定――形態論の立場――」（国語国文第八号）がある。前者は、アクセントの形式は、二つ以上の音節の連続からなる文節においてみとめ

られるとし――わたくしは、この点に共鳴を感ずる――、語のアクセントは、語の活用のごとく各種の文節に発現する形式の交替の体系(型)として存する、としたもの。後者は、従来、形態上にあらわれなかった表現機能の差とみなされるもののうちに、音の高低強弱によって、形態差がみいだせるとし、アクセントは、語を単位とする、とのたちばから単語の認定をこころみたものである。金田一春彦氏「東西両アクセントのちがいが出来るまで」(文学八月号)は、能登半島の諸方言におけるアクセントの分布状態から、東京式アクセントは、京阪式アクセントがかわってできたものではないか、とするもの。なが年、てがけてきた問題をとりあつかわれただけあって、容易には、他の追随をゆるさぬ感がある。なお、a、東京式は京阪式から変化してできた、b、京阪式は東京式から変化してできた、c、両式とも第三のものから変化してできた、の三つの想定のうち、現実に存在しないアクセント体系を仮説し、それをもとに推論するcは、存在価値がすくないとされている点、この論考が正当なものであるならば、比較言語学の定石をやぶる実例として、そのきわめて注目すべきこと、単に、日本語アクセントの史的研究にとどまらないというべきである。

つぎに、音韻史に関して。亀井孝氏「国語の変遷と歴史(要旨)」(国語学第十七輯)は、講演の要旨だけに、簡単にまとめすぎた結果と、例を、あまりに特殊な一個の問題にえらんだ結果とから、ふくみがおおすぎるきらいはあるが、とにかく、国語史全般に関するもので、言語史とは、ソシュールのいわゆる通時論とはことなり、体系全体から言語の変遷をとらえることである、とする。その例として、ハ行子音の変遷をかかげ、p>ɸ>hの変化を直線的におってゆくだけで歴史となるか、また、この変化が子音退化の現象であるにしても、かかる傾向が日本語を支配しているといいうるか、どうか、など、音韻史の研究に、おおきな示唆をあたえた。また、大野晋氏が、「国語史をどのやうに把へるか」の討論(国語学第十九輯)で、「音韻史は成立するか、どうか疑っている」と発言されているのも興味ふかく、この点、氏の見解の公表がまたれる。つぎに、前年公刊された大野氏の『上代仮名遣の研究』をめぐって、大野氏自身の「『上代仮名遣の研究』について――池上禎造氏にお答えして――」(国語学第十六輯)があり、書評に亀井氏(言語研究第二十五号)と馬淵和夫氏(国語と国文学五月号)がある。大野氏のは、母音調和のもつ論証的価値を以前よりわりびきしてかんがえるにいたったことが、あきらかにされている。この方がたどしいであろう。亀井氏の書評は、まず、清濁について、大野氏の問題の設定のしかたそれ自体に問題がある、とする。つまり、清濁の区別が存したという原則的な事実は、否定しえない以上、文字表記のうえに、清濁の区別が、厳密に反映しているか、どうか、と、とうことからはじめて、問題はどうしても、わりきれない異例にかかってくる、とされた。ここから、氏自身指摘するごとき、いろいろの根本的な、また、派生的な問題がでてくるわけである。つぎのオ段乙類音については、いわゆる有坂法則を、共時論的には、母音調和とはみなしがたいという。そして、オ段乙類音の消滅に対する音韻論的解釈をくわえ、大野説に対し異見をたてられた。このあたり、氏の理論的なさえがうかがわれる。しかし、氏は、問題の解決よりも、問題の

提起に、とかく、重点をおいて議論をはこんでいる。馬淵氏の書評では、在唐記の記事の解釈を大野氏と異にし、平安初期の母音オは、乙類ではなかったか、とされている。これらの書評は、大野氏の結論が不動なものではないことをかたるものとみなされる。このほか、特殊仮名遣に関しては、大野氏の「上代語の訓詁と上代特殊仮名遣」(『万葉集大成三』)「奈良時代のヌとノの万葉仮名について」(『万葉十二号』)がある。前者は、新見をまじえての概説、後者は、いわゆるヌの甲乙の別をノの甲乙の別にあらためた橋本博士の結論に証明をくわえようとしたもの。また、真武直氏「中国語音韻学から見た両類別をもつ万葉仮名原音の対差点」(福岡学芸大学紀要第一部第四号)は、甲乙ある清濁の仮名を韻鏡、広韻によって調査し、甲乙の別は、ゾドは開合の項で、ゴビベは等位の項で、ゲは七音韻鑑により外転内転の項で対差があり、ギは、四声切韻表により甲は濁音合口四等、乙は清濁音開口三等で、これのみ古音に属する、としたもの。基礎的作業としての労作であろう。このほか、木下正俊氏「唇内韻尾の省略される場合」(『万葉第十号』)がある。

漢字音に関しては、藤堂明保氏「中国音韻論と漢音呉音」(『国語学第十六輯』)などもあり、馬淵和夫氏『韻鏡校本と広韻索引』(日本学術振興会)は、貴重な労作。また、亀井孝氏の "On the Authenticity of on-Readings in Sino-Japanese" (The Annals of the Hitotubashi-Academy vol V, No 1)は、karlgren が Grammata Serica でいう漢音呉音は、大字典などによったもの、かかる反切より帰納した音と漢語のよみとはことなるゆえ、中国音韻史の資料としては、漢語のよみをつかうべきであるとする外国人への啓蒙である。なお、この論文において、興味のあるのは、序説に注記された Phoneme の概念の成立に対する東洋人としての批判にあるかとおもわれる。

このほか、上代関係では、村山七郎氏「連濁について」(『言語研究第二十六・七号』)「古代日本語の二、三の音韻現象について」(『国語学第十七輯』)がある。前者は、連濁は、日本語において有声～半有声子音が語頭にたちえた時代のなごりと解釈されないか、とするものであるか、問題は、むしろ、有声～半有声子音が語頭にたちえたか、どうか、の推定にあるのではなかろうか。後者は本誌前号、築島氏の批判のとおりであろう。なお、金田一京助博士「連濁は鼻濁音だった考」(『音声学会会報第八十四号』)は、ふるく、濁音は〈b〉〈d〉〈g〉のごとき音であり、これは、かつて浜田敦氏のとかれたように、中国語音から日本にはいったものではなく、日本本来の音であったろう、とされるもの、傾聴すべきであろう。

平安時代にはいって、馬淵和夫氏「平安時代の母音」(『国語第三巻第二号』)は、悉曇関係の資料から、オ・ヲ、イ・キ、エ・エの問題を論じたもの。中田祝夫氏の大著『古点本の国語学的研究』には、これまでに発表された中古音韻史に関する論考がおさめられており、同時に、字音をはじめ音韻史研究に必要なおおくの資料に接することのできるのは、なによりもありがたい。浜田敦氏「ハ行音の前の促音――P音の発生――」(『国語学第十六輯』)「音便――発音便とウ音便との交錯――」(『国語国文第三号』)は、前者は、平安初期前後から鎌倉初期にかけてのハ行子音〈p〉は、促音の発生とともに、そのあとにたつと破裂音化し、この結果、音韻体系に

/p/がくわわるにいたったが、この/p/は、ふるいハ行子音の復活、乃至などりではない、とするもの。しかし、促音のうしろに[p]が発音されたろうという推定を根拠として、すぐに、/p/が音韻体系のうちに座をしめるにいたったと、かんがえられるであろうか。なお、前記、服部博士の論文には、室町以後におこった/ɸ/∨/h/の問題がとりあげられており、注意すべきである。後者は、鎌倉室町時代、バ・マ行四段、ナ変の音便は、ウ音便、撥音便の二形が並存しているが、キリシタン資料では、撥音便は、語幹がu、ウ音便は、その他の母音におわる、という区別がほゞある、とし、また、漢字音で通摂の文字が「い」「う」で表記されるのは、日本語の音節「い」「う」が鼻母音だったからとされた。これに関連して、前田勇氏は、「近古末に於けるバ四マ四の音便事情管見」（国語国文第九号）で、おなじくキリシタン物を資料に、別の傾向をみちびきだされ、撥音便は話し言葉、ウ音便は書き言葉の性格がつよい、とされたが、これら三編は、理論と解釈との関係についてかんがえさせる論文である。なお、浜田氏には、「海東諸国紀に記録された日本の地名等について」（人文研究第五巻四号）があり、資料の整理として、重宝なものである。観世流の版本二種について調査された和田実氏の「謡曲の表記について」（国文論叢三号）は、音韻史料として大事なものだけに、この種の調査を他の流派、ふるい版本にもおよぼされる日を期待する。室町末から江戸上期にわたっての「ゆう」「よう」の相互転訛が、表記物をみてもいちじるしい傾向がある、とする吉川泰雄氏「近古国語に於ける長拗音『ゆう』と『よう』との相関」（『古典の新研究』第二集）は、氏独自の資料のあつかいで文証を提供されているが、術語に新味がほしい。江戸以降の音韻研究が管見にはいらないのは、さびしい。

このほか、前田正人氏「音節結合の法則と複合語」（国文論叢第三号）は、複合語の構成要素を音韻論的完結体とみる論であるが、その論証過程にも疑義のおおいのは、有坂音韻論の安易なひきあてゆえであるとみられまいか。つぎに、音声と意味との関連にふれた論文として、中井玄英氏の「音声と意味」（竜谷大学論集三四七号）は、内外の諸学説を引用して考察したもの。渡辺実氏の「音と意味（序説）――表情表現の破壊力と知的形式の抵抗力――」（国語国文第十一号）は、語音構造を積極的に破壊する表現的云い変えは、共時論のどこかに位置をしめるものとし、これとラングとの関係をとらえようとしたものである。

このほか、楳垣実氏「鼻音語の問題」（音声学会会報八五号）、「音節の研究――日英音節の比較――」（帝塚山学院短期大学研究年報第二号）、前田勇氏「連母音〔ai〕の音訛に就て」（国語学第十八輯）などは、それ〴〵に注意をひく論考である。

二、文字

文字論にうつって、まず、注意をひかれるのは、山田俊雄氏の「和歌の真名書きについての試論――朗詠和歌を中心にして――」（山梨大学学芸学部研究報告第五号）と、「いはゆる湯桶読・重箱読について」（成城文芸一号）の二論文である。前者は、万葉集以後の時代において、片かな・平かなが創案されたにもかゝわらず、なお、新撰万葉集のごときがのこったのは、なぜか、を究明したもの、日本語の表記の歴史の研究資料として、従来、国文学のひそみにならって、かな表記のみを主流とみなしていたことに警告

を発している。後者は、中世の資料を例に、漢字が、語形変化に参与すること、語原解釈を表現していること、逆に語の解釈を制限することなどをのべつつ、日本語表記における漢字を、文字論の史的展開によって解明しようとする方法論をのべている。二者とも、氏の意欲的な文字史研究のひとこまである。このほか、表記の史的研究として、水田紀久氏「ぬけだしたかな文字――おくりがな史の一断面――」（大谷学報第三四巻第二号）があり、漢字のよみかたをしめすためのおくりかなの実態を観智院本三宝絵詞を資料に調査し、これには客観的法則のないことをのべ、おくりかなの本質と、その変遷の研究を強調している。また、青木孝氏「変体漢文の一用字法――『者（テイレバ）』を巡って――」（国語学第十七輯）は、記録体の文字言語をも重視すべきである、として、「テヘレバ」「テイレバ」とよむ「者」字の考察をこころみたものである。一字再読字についての、小林芳規氏「漢文訓読史上の一問題――再読字の成立について――」（国語学第十六輯）と鈴木一男氏「反読字の成立について」（奈良学芸大学紀要第三巻第三号）は、あわせよむべき論考であろう。

つぎに、中田祝夫氏が『古点本の国語学的研究』のなかで「略体仮名の研究」なる一編をもうけ、かつ、別冊に仮名字体表、略体仮名綜合表をかかげ、豊富な資料によって片仮名の問題を論究されているのは、貴重である。このほかにも、訓点語関係の論文には、片仮名字体表を附したものがおおく、なかでも、大坪併治氏「石山寺本蘇悉地羯羅経略疏天暦点」（島根大学論集第四号）は、そのかな字体が、かつて、仮名遣及仮名字体沿革史料に紹介されたのと、かなり相異していること、略体かなとしては、かなり簡易度のすゝんだものであることを報告しているのは、注目される。

室町時代にはいると、キリシタン資料について、大塚光信氏の「本語小考――キリシタン版綴字への一基礎として――」（国語国文第六号）があり、また、深井一郎氏「コイヤード著懺悔録の表記法について」（金沢大学教育学部紀要第二号）がある。ともに綿密な基本的調査として価値のあるものとおもわれる。

文字用法を調査したものには、宮嶋弘氏「オの万葉仮名」（立命館文学十二月号）、杉本つとむ氏「西鶴の用字法覚書」（国文学研究第十一輯）がある。前者は、オをあらわす万葉仮名は、於・淤などにかわるまえは、「意」が普通であった、とするもの、後者は、西鶴の用字法も、当時の一般的なものであった、とするものである。なお、吉町義雄氏の「西洋に知られた最初の片仮名」（音声学会会報八四号）は、興味ふかい短篇である。

文字の分野においては、従来は、いわゆる形音義の形に関する歴史にちからがそそがれてきたのに対して、日本語における表記の歴史に対する研究が着実にすゝめられようとしている。これはよろこぶべき動向といえるであろう。未開拓なだけに、この面における研究者のすくないことが遺憾である。

三、語彙・意味

この分野においても、まず、特筆さるべきは、服部四郎博士の「『言語年代学』即ち『語彙統計学』の方法について――日本祖語の年代――」（言語研究第二十六・七号）であろう。言語の基礎語彙は、音韻・文法とおなじく核心的部分であり、その変化の速度は、言語と年代とをとわず、ほゞ一定している、という、アメリカで発達

した、どくあたらしい学説だけに、外国における反響と批評も紹介していただけると、一層、益するところがおおきかったとおもう。とまれ、おおいに日本の学界を刺戟するにたる論文である。つぎに、亀井孝氏の "Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese" は、Karlgren が "Philology and Ancient China" において論じた例を一々検討し、歴史以前、日本語に流入した中国語からの借用語は、事実上ほとんどない、ということをしめし、それを説明するための仮説として、structural discrepancy ということをいわれる。この仮説が、どこまでただしいか、どうかは、当面の例だけでは、なんともいえないであろうが、氏の意図は、問題の解決にではなく、提起にあるよし。ちなみに、本書は行論上、派生してくる諸問題についても、種々、示唆にとむ解釈や仮説がしめされている。たとえば、上代の乙類のエの音の発生に対する仮説のごときは、仮説としては、もっとも合理的な解釈であろう。おなじく、亀井氏の「『ツル』と『イト』」（国語学第十六輯）は、この二語と朝鮮語との関係をとりあげたもの。たゞし、サブタイトルに「日本語の系統の問題を考へる上の参考として」とあるごとく、ねらいは、にた語が系統論上の資料にならぬ危険性を強調するとともに、一見、によりのない語が、案外、同一起原から派生した可能性のある点に、注意を喚起したものとみられる。

つぎに山田忠雄氏「形容詞スルドシの成立」（日本大学文学部研究年報第四輯）は、あたらしい語彙論のために、基本語の消長に関する個別的研究をとき、文献の博引によって、スルドシの成立と、その要因をといている。いわゆる語史研究として、完璧にちかい労作であろう。このほか、長尾勇氏の「地蜘蛛考」（国語学第十九輯）は、着実な研究のうちに、方言周圏論への批判をふくんでいて、意義のあるもの。奥村恒哉氏の「代名詞『彼・彼女・彼等』の考察――その成立と文語口語――」（国語国文第十一号）は、「彼」というあたらしい語は、いままで空白になっていたところへ主格所有格目的格を充塡するというやくわりをはたすことによって、確乎とした位置を日本語のうちにしめた、とするてがたい考察である。

上代関係では、村山七郎氏「古代日本語語彙二、三の比較的考察」（民族学研究第十八巻第四号）は、クハシ（美）ナヰ（地）ナミタ（涙）シコ（醜）オモ（面）の五語をアルタイ語族諸語と比較しようとしたもの。武田祐吉博士「否定辞の展開」（上代文学第四号）は、「いな（否）」「な」という語を中心にとかれたもの。また、竹の子の異名「たかうな」の語原は「竹垣（タカミナ）」とする中川芳雄氏「たかうな（筍）の語源」（国語国文第四号）などもある。小嶋孝三郎氏「国語擬声語の原始形態」（論究日本文学創刊号）は、上代語にもとづき擬声語は畳語によって発達してきている、としたもの、ただし、「ユラ」の子音［j］［ɲ］が、舌端を硬口蓋、歯茎に近づけ又は接触させて出す音で」古代人がこれを「玉のふれあう至妙のひびきの形容とし」たことに敬服されたり、簡単に母音諧調という術語をつかわれたりしているのは楽観的にすぎる。佐藤茂氏の「『あらたしき』と『あたらしき』」（文芸研究第十六号）は、琴歌譜片降の一例のみをもって、「あらたしき」が「あたらしき」よりもふるいとすることに疑義あり、とされたものである。訓点語関係では、曾田文雄氏の「訓点語彙（訓点語と訓点資料第三輯）があり、高野山光明院所蔵蘇悉地羯

羅経寛弘九年点の、乎古止点と仮名点とによって音または訓のしられる儀訓を、前後の解読文もそえて配列した労作である。

つぎに、田中重太郎氏「『ぶち』『どろ』」（平安文学研究第十六号）は、資料とする本文に、十分注意すべきことをとかれたものまた、同氏には、「枕冊子定本語彙考証」（同上）もある。くだって、前田金五郎氏「『小人嶋』考――西鶴語彙管見――」（国語と国文学八月号）は、「小人島」というのは、当時、その存在が信ぜられていた、として文証をあげたものである。

なお、このほか、金田一京助博士の「本州蝦夷の言語」（国学院雑誌第五十五巻第一号）や、池上禎造氏「漢語の品詞性」（国語国文第十一号）などもある。

意味に関する論文にうつると、春日政治博士に「語彙雑考」（国語学第十七輯）がある。語彙は、音韻文法の研究に比し、いまだ漠然としているが、単語を意義論の領域にもちこんで、日本語の意義の本質を究明できないだろうか、とされたのは、今後の一指針として傾聴すべきであろう。博士のこのことばを考慮にいれてみてゆくとき、たとえば、宮城文雄氏の「『心深し』の語義について――源氏物語の用例を中心に――」（徳島大学学芸紀要第四巻）はこの語の第一義は、知情融合の調和的なこころのさまを意味するものであり、平安朝の理想的な人間的態度であった、とするものであるが――この種の論文は、他にもおおいが、これらが、国文学の分野においては、意味のあるものであるにせよ――かゝる規定のしかたが、はたして、国語学としての意味論の要請にかなうものであろうか。意味論については、前年、服部博士が「意味に関する一考察」（言語研究第二十二・三号）を発表されて以来、二三この線にそった口頭発表もあったが、いまだ軌道にのったともおもわれない。それだけに、意味論に関する論文もすくないようである。とまれ、竹内金治郎氏の「『彩色』考」（日本大学文学部研究年報第五輯）は、風土記撰進の制文中などにみえる「彩色」という語の語義は、彩色料の意で、後世の顔料型料のごときをさしたもので、訓読のおりは「シミノモノ」とよむべきである、とするてがたい論証である。寿岳章子氏の「接頭辞『こ』のもつ問題」（西京大学学術報告第四号）は、接辞「こ」の意義のとらえがたいことをのべるとともに、抄物・日葡辞書などを資料に、当時、「こ」は、自由な造語力をもっていたことをのべている。ちなみに、氏が、抄物、キリシタン物、狂言の資料群は、おの〳〵特殊なものゆえ、三者共通の地盤をきずくのは、はやすぎる、とされたのは、きくべきであろう。つぎに、大久間喜一郎氏「国語に於ける相反意義の問題」（文学研究第十一号）は、関連あるいくつかの語義をもつ多義語には、「われ」という語のように、相互に関連性のとぼしい語義がみとめられるが、このいわゆる相反意義の考察から語義変遷の実情を把握しようとするものである。しかし、これも方法論上、今後にまつべき点がおおいとおもわれる。なお、賀集寛・久保和男両氏の「三音節動詞の連想価表」（人文論究第五巻第三号）は、刺戟材料としての有意味語の客観的な汎化尺度を決定するための資料集。心理学ばたけの研究であるにしても、十分注意すべき労作であろう。最後に、とくに、語彙論ないし意味論を論じたものではないが、亀井孝氏の「日本語とその研究との背景」（一橋論叢第三十二巻第三号）には、この領域に関しても示唆にとむ言がふくまれている。たとえば、万葉集に比

して、古今集で「我」と「汝」との使用が、きわめてとぼしいのは、洗練された古今集の歌人たちが、いまだ、はるかに素朴な万葉集の歌人たちよりも、つよい自意識をもっていて、そのために、かれらは、言語表現のうえに、これをのぼせることを、様式的な技巧として、しりぞけたのである、としている。

以上、できるかぎり、担当した項目に関する論文をもとめたがなお、もらしたものもすくなくはないであろう。また、よみのあささから、まとはずれの言もあるか、を、おそれる。これらの非礼は、つゝしんでおわびもうしあげる。

なお、現代語を対象とする研究状況については、「国立国語研究所要覧」などを参照されたい。——国学院大学助手——

六、国語教育

上甲幹一

昭和二十九年の国語教育界にはいろいろな現象があったが、大づかみにまとめてみると、全体としては、国語教育理論の論議よりも、国語学習指導実践のための方法技術が真剣に考えられた年であったといえよう。もちろんこうした傾向は、二十九年に至って突如起った現象ではなく、戦後の新教育が徐々に現場に根をおろした結果としての自然な現象であるが、戦後十後をかえりみると二十九年から特にその傾向がめだったという意味である。

といって、国語教育界がおしなべて指導技術研究一本槍で進んだというわけではない。そこには、この指導技術問題をめぐって大小さまざまな問題がとりあげられ、あるものは一応解決され、あるものは未解決のまま年を越した。

以下、その概観をすれば——

この年に刊行された国語教育の単行本・講座の類では、輿水実氏編「人間形成の国語教育」(有朋堂刊、1月)、前年度から刊行中の国語教育実践講座「五年生の学習指導」「国語学習指導の計画」(ともに牧書店刊、3月)、「六等生の学習指導」(牧書店刊、3月)、阪本一郎・大久保忠利氏等編「現場の国語教育」(三巻、春秋社刊、4月)、高野柔蔵氏「入門期の国語指導」、吉田友治氏「文集のつくり方」、馬場正男氏「読めない子の指導」、綿田三郎氏「どんな文がよいか」(いずれも明治図書刊、4月)、志波末吉氏「国語の研究授業」(明治図書刊、5月)、倉沢栄吉氏「国語の教師」(牧書店刊、6月)、平井昌夫氏「国語の能力別グループ指導の具体的展開」(東洋館出版社刊、7月)、文部省「中学校高等学校学習指導法国語科編」(明治図書刊、7月)、鬼頭礼蔵・オオタトシオ氏「言語技術の指導法」(東洋館出版社刊、8月)、西村省吾・大山正幸氏「学習指導の基礎技術」(明治図書刊、9月)、飛田隆氏「国語教育の実践理論」(新思潮社刊、9月)、日本コトバの会「教師のための国語科」(河出書房刊、11月)、平井昌夫氏「国語教育の指導計画と評価」(東洋館出版社、12月)などいずれも現場の指導方法技術に直結したものである。中でも、平井昌夫氏「国語学習とテープレコーダー」、猪股辰彌氏「入門期の読みの指導」を6月に刊行しはじめ、わずか半年の間に、国語教育関係だけで、上甲幹一「共通語の学習指導法」、大久保忠利氏「小